

平成 30 年度 年報



初代桂春団治の羽織

大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

目次

| | | |
|---|--|----------|
| 1 | ごあいさつ _____ | 1 |
| 2 | 草創期の「松竹芸能」略史 寄稿 相羽秋夫（大阪府立上方演芸資料館運営懇話会委員、演芸評論家） _ | 2 |
| 3 | 大阪府立上方演芸資料館運営状況（平成30年度） _____ | 7 |
| 4 | 収蔵資料の紹介 曾我廼家五郎の歌舞伎台帳（台本）『神禮盟縁結』の紹介 _____ 演芸関係のSPレコード文献資料について _____ | 12 21 |
| 5 | 展示資料の紹介 _____ | 25 |
| 6 | 大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等 _____ | 32 |

ごあいさつ

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）は、平成 27 年度から進めてきた資料整理が一定区切りを迎えたことから、収蔵庫の資料を大阪府庁（咲洲庁舎）に移転し、今年度、新たに常設展示エリアと企画展示エリア、体験・ワークショップエリアを備えた施設としてリニューアルオープンしました。ご協力いただいた多くの方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

リニューアルしたワッハ上方では、話芸である上方演芸の重要な要素である「大阪弁」の解説や、演芸の歴史年表などを常設展示しており、時宜にかなった企画展を年 2 回実施することとしています。ほとんどの展示は日本語に加え 4 か国語（英語・中国語〔繁体・簡体〕・韓国語）表記としているほか、外国人に対応できる若手演芸人を常時配置しています。加えて、羽織を着て高座で記念撮影ができるコーナーを設けるなど、インバウンドの方々にも楽しんでいただける設えにしています。

また、新進気鋭の演芸人の変顔映像による「にらめっこ」コーナーでは、若い方にも大いにお楽しみいただいているとともに、毎月 4 回、プロの演芸人を講師に招き、演芸の魅力をわかりやすく伝える「ワークショップ」を開催しています。視聴ブースでは、引き続き、上方演芸・上方喜劇に関する過去のテレビ・ラジオ番組をお楽しみいただけるなど、規模は小さいながらも、老若男女、初来館者・リピーター問わず満足いただける構成となっています。

上方演芸に興味がある方はもちろん、そうでない方にこそ、ご来館の上、演芸の世界の一端に触れていただければ、その面白さ、そして深さにほれ込んでいただけたらと思います。

今後は、引き続き資料の整理を進めるとともに、リニューアルしたワッハ上方の認知度の向上に向け、周知・広報に努めてまいりますので、在阪放送局、演芸プロダクションをはじめ、地元商店街や観光・交通関係者、大学等研究者及び専門家等の皆様方には、変わらぬご支援をお願いいたします。

結びに、本年報を通じて、資料館としての取組みをより一層ご理解いただき、館の周知・広報にもご協力いただければ幸いです。

館長 須田 弘樹

草創期の「松竹芸能」略史

相羽 秋夫
(運営懇話会委員)
(演芸評論家)

戦後、関西の演芸界を吉本興業と並んでリードしてきた松竹芸能。吉本興業には何冊もの社史が存在し、研究者の文献も数多くあるが、意外や松竹芸能には、そのような文献が全くない。新時代を迎えた今、何らかの記録を残すことが後世の人のために必要と考えた。

筆者は、1966（昭和41）年に松竹芸能に入社し、78年まで在籍した。多少なりとも内部のことを承知している。そこで、筆者より以前の60年に入社し、芸能部長の要職にあった、現在、芸能プロダクション「三栄企画」会長の鳥江三也氏の証言や、断片的な記述を拾い集めて、なんとか略史を纏めてみた。

他の人によって、より充実した社史が完成されることを願って、草創期の松竹芸能略史をここに記したい。（以下敬称略）

1955（昭和30）年

「戎橋松竹」の支配人を退職した勝忠男は、在職中に得た人脈を柱として、芸能プロ「新生プロダクション」を設立した。

「戎橋松竹」は47（昭和22）年に、戦後の大阪の地に一番早く誕生した演芸場である。この演芸場の主役であった砂川捨丸・中村春代、三遊亭小円・木村栄子、五条家菊二・松枝などの漫才コンビ、6代目笑福亭松鶴を襲名前の笑福亭枝鶴、奇術の一陽斎正一らが主な所属芸能人である。

勝社長を中心とした家族的な雰囲気運営され、所属の芸能人は会社を通さない仕事に行った時にも、いくらかの手数料を自主的に会社に納入して、会社の経理面での援助に供した。

勝は、「五厘屋ごりんやになるな」（5%の薄利な手数料を取って良しとする芸能プロを揶揄するという言葉）がモットーで、たぐい稀な経営手腕を発揮して、業績を伸ばしていった。

所属芸能人の中には、かしまし娘結成前の正司照江・花江がおり、勝は56（昭和31）年に長女の歌江を加えてトリオとして売り出す。このトリオが、後の「松竹芸能」の大きな財産になっていく。

1956（昭和31）年

漫才作家秋田 實みのるは、「宝塚新芸座」を退社し、「上方演芸」を設立する。

秋田は、漫才に台本の必要性を論じ、プロの漫才作家として名を馳せた。笑芸のみならず広い範囲に旺盛な文筆力を発揮した“漫才作家の神様”的な存在の人である。

「宝塚新芸座」時代からの仲間であるミヤコ蝶々・南都雄二、夢路いとし・喜味こいし、秋田Aスケ・Bスケ、ミスワカサ・島ひろしら後世に名を残す名コンビらが所属していた。

ラジオやテレビなどの分野にも果敢に挑戦し、数々のユニット番組に参画するなどめざましい

活躍をした。また劇団の結成や雑誌の創作なども始め、幅の広い足跡を残した。

1958（昭和33）年

5月、道頓堀角座開場。主な出演者は、鳳啓助・京唄子、ミスワカサ・島ひろし、中田ダイマル・ラケット、花月亭九里丸（以上上席）、島田洋之助・今喜多代、砂川捨丸・中村春代（以上中席）、海原お浜・小浜、秋田Aスケ・Bスケ、桂福団治（3代目桂春団治）、かしまし娘（以上下席）などである。

これらの出演者を、「新生プロ」と「上方演芸」から松竹が提供を受けて、メンバーを編成した。

11月、2社から提供を受ける事務の煩雑さを考慮。松竹が資本を投入し、2社を合併させ「松竹新演芸」が設立される。“松竹”と新生プロの“新”と上方演芸の“演芸”を合わせた社名である。

松竹の白井昌夫が社長に就任し、勝忠男と秋田實を取締役とする陣容で出発する。事務所に大阪市中央区谷町のビルの2階を借りて、社員30名程度の門出であった。

1959（昭和34）年

1月、神戸新開地に、「神戸松竹座」が開場した。3階席まである大きな劇場で、前身のOSK（大阪松竹歌劇団）などの公演に用いたオーケストラボックスがそのまま残されていた。正月などは満席になるが、常時300人前後の入場者数であった。

3月、演芸の角座として初の襲名興行を行う。福団治改め3代目桂春団治の披露公演が下席に行われた。

口上には、笑福亭枝鶴（6代目松鶴）、2代目旭堂南陵、8代目桂文楽（東京より来演）、三遊亭百生（同）、それに花月亭九里丸、芦乃家雁玉が加わった。

この興行は、3代目桂春団治の実父2代目桂春団治の7回忌追善法要を兼ねていた。

11月、角座の名物となる「松竹名人会」の第1回を開催。以降毎年11月上席は、東西の名人と呼ばれる一流演芸人が顔を合わせる興行が開催された。通常は“流し込み”と言って、見た所から見た所までを自由席で観劇する方法だが、この興行に限り、昼夜2回完全指定席制であった。因みにこの年の1回目は、かしまし娘、中田ダイマル・ラケット、海原お浜・小浜、上方柳次・柳太、ミスワカサ・島ひろし、3代目桂春団治らの上方勢に、古今亭志ん生、8代目桂文楽、古今亭朝太（志ん朝）、7代目春風亭柳橋、柳家三亀松、広沢菊春という、豪華な顔ぶれが東京より来演した。

1960（昭和35）年

社屋を道頓堀の旧松竹座地階に移転する。社員が増え手狭になったことと、角座を中心にした活動に便利であること、また松竹の持ち物であることなどの利点から、旧松竹座地階に白羽の矢が立ったものと思われる。

1962（昭和37）年

社名を「松竹芸能」に改名する。仕事の範囲が拡大し、演芸のみならず演劇や歌などの分野に進出することになり、演芸だけに限定される社名では不都合だ、という理由による。「新生プロ」

の番頭格だった長谷川渉一が芸能部門を、「上方演芸」の同じく番頭格だった藤井康民がテレビ・ラジオ部門を担当して、総合芸能プロダクションとしての一步を歩み始める。

3月、角座で、枝鶴改め6代目笑福亭松鶴の襲名興行が行われた。口上には、3代目林家染丸、3代目桂春団治、笑福亭松之助、10代目桂小文治、砂川捨丸、都家文雄が連なった。

11月、角座で砂川捨丸舞台生活60年記念公演が開かれた。漫才の神様として幕内で尊敬された捨丸の実に芸歴60年に及ぶ業績を讃えての公演である。中席10日間のプログラムのハイライトは、「御殿萬歳」の復活上演である。砂川捨丸を中心に、中村春代、海原小浜、華井八千代、浮世亭夢丸という、捨丸に次ぐベテラン漫才師によって上演され、大きな話題を呼んだ。

1965（昭和40）年

8月、第1回「角座落語会」が開催される。上方の落語家が15人程の時代で、“上方落語の危機”が叫ばれていた。その落語の発展のために、松竹芸能が力を入れ、毎月1回、第1土曜日の本興行を30分早く切り上げ、午後9時から50円の入場料で開放した。因みにその年の「松竹名人会」の入場料は380円である。出演者は、6代目笑福亭松鶴、3代目桂春団治、初代森乃福郎、2代目林家染語楼、3代目桂福団治、3代目桂小春（現4代目福団治）、2代目桂春蝶らであった。

11月、角座で「漫才百年祭」が行われる。ニコニコ万才、音曲万才、兵隊万才、文化万才、浄瑠璃万才、剣劇万才といった“漫才”以前の“万才”の時代のパターンが紹介された。ハイライトは「三曲萬歳」で、“萬歳”の時代に演じられた三味線・胡弓・鼓の三つの楽器の伴奏による茶番劇である。

砂川捨丸・中村春代、浮世亭夢丸による「忠臣蔵三段目」が演じられた。この時、夢路いとし・喜味こいしも“漫才”として出演しているが、2人は「大宝芸能」の所属であったが、以降も年に2～3回の割合で角座に出演している。

1966（昭和41）年

12月、社名を「日本興業」に変更する。取締役社長に就任していた勝忠男は、劇団「松竹新喜劇」の社長も兼任していた。

この劇団の座長である藤山寛美が借金問題の不祥事を起こし、その責任を取らせて劇団を解雇された。この座長の穴をミヤコ蝶々・南都雄二で埋めたが不入りが続き、1年足らずで寛美を復帰させた。この責任問題で、勝と松竹との間に距離が生じ、社名変更に至ったというのが当時囁かれた理由だが、真相は不明である。

1968（昭和43）年

社名を元の「松竹芸能」に戻す。“松竹”のブランド力は高く、特に地方での興行や営業に多大な影響を与えていたが、元の名前に戻ったことで、会社は活気付いた。

この頃から、大阪だけを拠点にしては支障が出るようになり、福岡事務所や東京事務所の開設につながる。（両事務所の開設年不明）

同時に、次代の演芸人や演劇人を生み出すべく「松竹芸能タレント養成所」を開設する。ここから、春やすこ・けいこ、宮川大助・花子の大助、あるいは歌舞伎の片岡愛之助らを輩出する。

1969（昭和44）年

常務取締役だった秋田實が退社。秋田は、営業面にタッチせず、漫才作家数名を擁していた文芸課を統括し、また上方演芸界の大所高所から参画した。テレビやラジオなどの演芸人を使った番組の企画制作にも大きな影響力を持っていた。

1970（昭和45）年

秋田實、「KAプロダクション」を設立。Kはビルのオーナー岸本の、Aは秋田のイニシャルから名付けられた。

そして、「上方演芸」時代から一緒だった藤井康民が、テレビ部署の役職を退いて、「KAプロ」の社長に就任した。数名の社員も同時に従った。

さらに、当時人気絶頂にあった海原お浜・小浜、若井はんじ・けんじ、横山ホットブラザーズと、それぞれの一門が、「KAプロ」に移籍する。但し、はんじ・けんじ門下の筆頭弟子若井ぼん・はやとだけは松竹芸能に残った。

当時、毎日放送テレビの日曜日の昼の時間帯は「いとし・こいしのガッチリ買いましょう」、「はんじ・けんじのダイビングクイズ」、「お浜・小浜の千客万来」がいずれも高視聴率を取り、“サンデー毎日”だと週刊誌名になぞらえて噂された。

これほどの人気者であったお浜・小浜とはんじ・けんじの両コンビに加えて、絶妙な音楽ショーの第1人者であった横山ホットブラザーズの3組が、同時に抜けたことは、少なからず松竹芸能に影響を与えずにはおかなかった。

その上に、この頃から吉本興業のさかんな引き抜きが始まった。それによって、かしまし娘と2本柱の存在であった中田ダイマル・ラケットに始まり、平和ラッパ・日佐丸、塚本やっこ・市松笑顔・市松笑美子（三人奴）らが、吉本興業に移籍した。この状況を見て仲介人が現れ、両者は互いに引き抜かないとする「2社協定」が結ばれ、この騒動は鎮静化した。

この時代の松竹芸能の威勢を示すものとして、毎年8月31日を慰安の日と定め、全所属芸能人と社員が、有馬温泉内の「有馬グランドホテル」を全館貸し切りで、宿泊付きのパーティを開いたことだ。さらに、そのパーティに前後して、自社以外の芸能人や知名人を招待してのゴルフコンペ「松竹芸能杯」を開催し話題を呼んだ。

1976（昭和51）年

9月、神戸新開地の「神戸松竹座」が閉館した。神戸の最大の盛り場が三宮に移り、新開地に人が集まらず開館以来たえず低迷をしていたが、ここに14年の短命を終えた。

この頃から、従来の演芸部門と並んで演劇部門にも一層力点を置き、自主公演「松竹現代劇」がさかんに上演されるようになる。

角座の舞台から“所作台”を撤去したのもこの時期だ。これまで演者は足袋^{たびはだし}跣足で舞台をつとめていたが、所作台の撤去によって靴や下駄などを履く高座スタイルに一変した。このことにより、芸風に大きな変化をもたらした。

1977（昭和52）年以降

傘下の演芸人を提供していた「新世界新花月」、さらに精神的支柱であった「道頓堀角座」の閉館へと繋がる。「角座」は「浪花座」の2階、さらに同座1階へ。旧角座の地階、「DAIHATSU MOVE 道頓堀角座」、そして2019（平成31）年1月から「心齋橋角座」へと移転する。

社屋も旧「松竹座」地階からアメリカ村、リクルートビル、難波元町、DAIHATSU MOVE 道頓堀角座、大阪松竹衣裳ビルへと移動する。

経営陣は、勝忠男が会長職になり、松竹から社長を仰ぐ体制に変化する。そして勝は鬼籍に加わった。

ここからの社史は、現在経営に携わっている人々の手によって書き進めて欲しい。

人間は歴史から学び、新しい時代を紡ぐ。この略史が「松竹芸能」の輝かしい未来の一助になればと願っている。

<参考文献>

「昭和上方演芸史」三田純市 學藝書林

「上方落語の戦後史」戸田学 岩波書店

「大阪春秋」172号 新風書房

大阪府立上方演芸資料館運営状況（平成 30 年度）

■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数実績〔月別推移〕

| 月 | 営業日数 | 男 性 | | | 女 性 | | | 計 | リクエスト件数 |
|-----|------|--------|-----|-------|-------|-----|-------|--------|---------|
| | | 大 人 | 中高生 | 小学生以下 | 大 人 | 中高生 | 小学生以下 | | |
| 4月 | 22 | 625 | 14 | 7 | 244 | 23 | 13 | 926 | 534 |
| 5月 | 21 | 644 | 13 | 8 | 240 | 9 | 12 | 926 | 557 |
| 6月 | 21 | 569 | 108 | 4 | 181 | 104 | 4 | 970 | 528 |
| 7月 | 23 | 651 | 16 | 9 | 292 | 11 | 7 | 986 | 603 |
| 8月 | 21 | 702 | 29 | 39 | 358 | 44 | 21 | 1,193 | 686 |
| 9月 | 20 | 551 | 7 | 9 | 29 | 7 | 17 | 883 | 553 |
| 10月 | 22 | 582 | 2 | 8 | 240 | 6 | 11 | 849 | 590 |
| 11月 | 21 | 544 | 6 | 11 | 243 | 20 | 10 | 834 | 572 |
| 計 | 171 | 4,868 | 195 | 95 | 2,090 | 224 | 95 | 7,567 | 4,623 |
| H28 | 255 | 10,123 | 119 | 252 | 4,079 | 121 | 194 | 14,888 | 8,122 |
| H29 | 255 | 9,170 | 135 | 198 | 4,267 | 125 | 201 | 14,096 | 7,096 |

※ 12月～3月は、リニューアル工事のため休館

《参考：1日平均入館者数》

| | |
|-------|-------|
| H28年度 | 58.4人 |
| H29年度 | 55.3人 |
| H30年度 | 44.3人 |

■ 映像音声資料視聴上位 10 点

| タイトル |
|---|
| 花紀京 岡八郎 蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京・岡八郎 泥棒と鈴／恋の売上税 |
| サンドウィッチマン ライブ 2007 |
| 読売テレビ開局 45 年記念 平成紅梅亭特選落語会 特選 噺家の会 |
| 花紀京 岡八郎 蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京 スリ貴族／究極の結婚式 |
| 20 世紀名人伝説 爆笑!! やすしきよし漫才大全集 ① |
| 爆笑オンエアバトル NON STYLE |
| NON STYLE LIVE 2009 M - 1 優勝できました。感謝感謝の 1 万人動員ツアー |
| 花紀京 岡八郎 蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京 どり猫物語／夢ロード |
| NON STYLE LIVE 2008 IN 6 大都市 ～ダメ男 VS ダテ男～ |
| 中川家の特大寄席 |

■ 運営懇話会開催実績

平成 30 年度は、計 2 回を開催（12 月 17 日（月）、1 月 24 日（木））

■ 資料活用検討委員会開催実績

平成 30 年度は、1 回を開催（8 月 23 日（木））

■ 資料整理部会開催実績

平成 30 年度は、計 20 回を開催

■ 研修会実施報告

部会出席者で研修会を実施。毎回、テーマに沿って、荻田部会長から講義を受けた。

<実績>

| 部 会 | 開 催 日 | 研 修 内 容 |
|--------|--------------|---------------------------|
| 第 3 回 | 5 月 8 日（火） | 「壹生宝」（曾我廼家五郎の歌舞伎役者時代）について |
| 第 11 回 | 10 月 30 日（火） | 「浪花方言」について |
| 第 12 回 | 11 月 20 日（火） | 「根問」について |

■ 館外展示開催実績

○目的：大阪が誇る上方演芸の過去から現代までの移り変わりと、その時代に活躍した演者にまつわる資料を展示し、府民に上方演芸に親しんでもらう機会を提供するとともに、ワッハ上方のPRを図った。

○場所：府内2ヶ所（大阪市内〔梅田〕、東大阪市）

| 場 所 | 開催時期等 | 会場風景 | |
|---|---|--|---|
| <p>大阪工業大学 梅田キャンパス 「OIT 梅田7-」 *1階ギャラリー (大阪市北区)</p> | <p>【開催時期】 ・10月1日(水)～14日(木) [14日間]</p> <p>【見学者数】 ・来館者数 14,112人</p> <p>【タイトル】 ・上方演芸って? ～上方演芸入門編～</p> <p>【アンケート結果】 ・満足度 78.6%</p> |    |    |
| <p>大阪府立 中央図書館 *1階展示コーナーA (東大阪市)</p> | <p>【開催時期】 ・10月16日(火)～11月7日(水) [23日間]</p> <p>【見学者数】 ・来館者数 32,968人</p> <p>【タイトル】 ・上方演芸って? ～上方演芸入門編～</p> <p>【アンケート結果】 ・満足度 88.9%</p> |    |    |

上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人さんがあまたおられます。大阪府立上方演芸資料館では、時代を代表する演芸人の方々の功績や魅力を後世に伝えたいと考えています。

「上方演芸の殿堂入り」とは…

上方演芸資料館では、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛し親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」名人を決定しています。これまでに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど 56 組 90 名の方々が受章されています。

また、第 22 回目を迎えた平成 30 年度は、「レッズゴー三匹」と「三遊亭小円・木村栄子」が受章され、表彰式を令和元年 6 月 10 日に上方演芸資料館で開催しました。



レッズゴー三匹



三遊亭小円・木村栄子

(画) イラストレーター成瀬國晴氏

「上方演芸の殿堂入り」演者一覧表

| | |
|--------------|--|
| 第1回(平成8年度) | 初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸 |
| 第2回(平成9年度) | ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・中田ラケット、花月亭九里丸 |
| 第3回(平成10年度) | 六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童 |
| 第4回(平成11年度) | 二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若 |
| 第5回(平成12年度) | 四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児 |
| 第6回(平成13年度) | 二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、富士月子 |
| 第7回(平成14年度) | 橘ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子 |
| 第8回(平成15年度) | 都家文雄・都家静代、林家とみ |
| 第9回(平成16年度) | 夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし |
| 第10回(平成17年度) | 三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・海原小浜、宮川左近ショー |
| 第11回(平成18年度) | ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵 |
| 第12回(平成19年度) | ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助 |
| 第13回(平成20年度) | 横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ |
| 第14回(平成22年度) | 三代目桂米朝 |
| 第15回(平成23年度) | 二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・若井けんじ |
| 第16回(平成24年度) | 上方柳次・上方柳太、岡八朗(コメディアン) |
| 第17回(平成25年度) | 川上のぼる、木川かえる |
| 第18回(平成26年度) | 二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ |
| 第19回(平成27年度) | 秋田Aスケ・秋田Bスケ、花紀京(コメディアン) |
| 第20回(平成28年度) | 三代目桂春団治、二代目春野百合子 |
| 第21回(平成29年度) | かしまし娘 |
| 第22回(平成30年度) | レッゴー三匹、三遊亭小円・木村栄子 |

※ 平成8年～平成30年度／56組90名

所蔵資料の紹介

曾我廼家五郎の歌舞伎台帳（台本）『神禮盟縁結』の紹介

荻田 清

(資料整理部会長)

(梅花女子大学名誉教授)

平成29年度の報告書でふれたように、曾我廼家五郎関係資料には貴重なものが本資料館に寄贈されている。五郎がまだ中村珊之助という歌舞伎役者だったころの自筆稿本が二冊あり、今回は台詞書抜き帳『壹生宝』を紹介した。今回はあと一本の歌舞伎台帳（台本）を紹介する。

本来、全文翻刻が望ましいのであるが、台帳（台本）の翻刻は膨大な分量となるため、あらずじを記すに止める。ただし、可能なかぎり詳細な内容が把握できるよう、人物の登退場をていねいに記したつもりである。

まず本の基本情報を簡単に記す。

【大きさ】縦 18.5 糎×横 13.2 糎

【表紙・裏表紙】厚紙ではなく、本文と同じ紙。

【資料コード】00170357

【丁数】・道具帳と小道具帳が3丁（6頁）。

・本文88丁（176頁）。1頁11行の罫紙（罫の色は赤）。

・増補部の表紙は茶色紙1枚

・道具・小道具帳1丁（2頁）

・増補部本文16丁（32頁）

表紙には墨書きで以下のようにある。

紙員 壹百拾壹葉

先づ明けまして初春にさても若手の勢そろへ

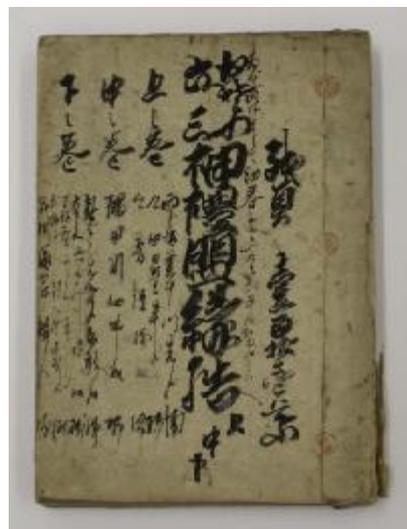
おその
六三

神 禮 盟 縁 結

上 中 下

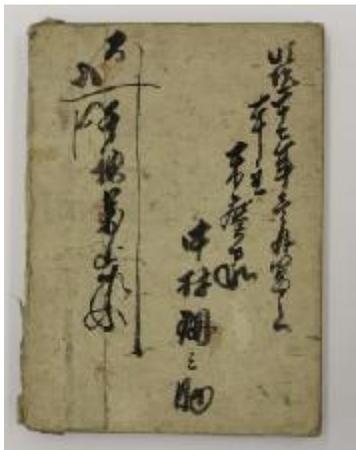
上之巻 向じま魚十門先の場
々 四畳半の場
々 普請場の場

中之巻 隅田川心中の場



下之巻
 新ばしおその屋形の間
 大工六三郎内の間
 三河屋うら手の間
 おその部屋ころしの間
 品川海岸殺の間

表紙の裏には「根本集 第壹号」の文字がある。「根本」は「ねほん」と読み、台帳（台本）と意味は同じ。「第壹号」とあることから、こうした本を以後も書き続ける予定であったことがわかる。



裏表紙には「明治二十七年 月 写上 本主 末広家 中村珊之助 大入り 叶 千秋萬歳」とあり、明治27年1月に（増補部分を除く）、写し終わったという意味にとれる。

すべて五郎（中村珊之助）本人の自筆と思われる、歌舞伎台帳の形式を忠実に真似ているものである。注目すべきは紙の継ぎ目などには、煩雑なほどに「和田」（五郎の本名は和田久一）の丸印が捺されており、それが何を意味するのか。少なくとも、この本に対する本人の思い入れの強さを示していると思われる。

道具帳の最初の一丁半（3 頁）は大道具舞台飾りの絵。後年趣向を凝らした案内絵葉書を多数創案、板行した人ゆえ、自筆の絵であろうと思われる。

次の一丁半は小道具帳。上の巻返し前までを記すと、

口 門松 壹つい／しめなわ 二つ／ごんぼなわ いせゑび だい／＼ 壱つ／すて床木
 二つ／たばこぼん 一つ／ぼん 茶わん 三つ／てをけ 壱つ／三味せんばこ 壱つ／札
 二百円／大工道具 壱式 なにもかも／くつ 一／ステツキ 二／返し

以下省略するが、ここも実に細かく記している。

本文から十一行の罫紙となって、まず二丁（4 頁）は役人替名。最後の半丁（1 頁）は無記入。役者名は記入していないが、竹本連中・清元連中・はやし連中まで記している。

役人替名

- 一 大工六三郎
- 一 々 与吉
- 一 芸妓 おその
- 一 々 小糸
- 一 半玉 おしげ
- 一 糸屋佐七
- 一 茶店 お花
- 一 仲居おしま
- 一 全 お光
- 一 魚十お辰
- 一 母 をとみ
- 一 箱まわし 千吉
- 一 川崎九郎
- 一 村上綱義
- 一 三河屋宗兵衛

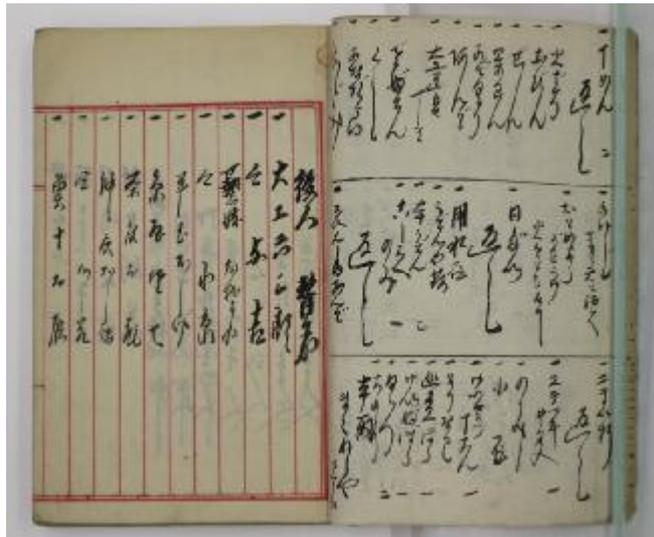
- 仕出し 八人
- 舟頭 壹人
- 車夫 壹人
- うどんや 貳人
- 警部 壹人
- 巡查 壹人
- 警察医 壹人
- 犬 壹匹

竹本連中
清元連中
はやし連中

【上之巻】

①茶店前から魚十前

- ・茶店娘お花が、正月のためいつもより忙しく働いている。
- ・村上綱義が芸妓おその、川崎九郎、芸妓小糸、箱まわし千吉らを連れて、向島へ向かう途中、茶店のお花とあいさつする。
- ・一行は魚十へ着く。座敷へ行こうとするが、小糸は、人に会うので門口にしばらくいたいという。川崎は小糸が間夫と会うのかと嫉妬する。
- ・千吉が川崎をなだめて、いっしょに奥の座敷へ入る。
- ・小糸は糸屋佐七と会う。久しぶりにあった二人、小糸と佐七の口説。



- ・大工の六三郎と与吉（六三郎の弟分）、道具箱を持って出て来る。
- ・小糸は佐七に、川崎が身請けしようとしているので、何とかしてほしいと頼む。
- ・佐七は、今ここに三百円の金があるが、自分の自由にはできない。それでも何とかすると約束する。
- ・奥より千吉が出てきて、川崎がうるさく言うので小糸を連れて行く。小糸は佐七に、いつもの四畳半で待っていてほしいと頼んで、入る。
- ・佐七と六三郎が話し込むので、与吉は居眠る。六三郎は若旦那佐七に強意見する。
- ・（このあたりに「和田」の朱印多数見られる。和田は「与吉」を意味するか）
- ・六三郎と与吉、仕事をしに、魚十に入る。
- ・村上と川崎が出て来て、悪工みの相談。糸屋の佐七が大金を持っているらしいので、それを巻き上げようとの密談。

「にぎやかなる流行唄にて 返し」

②四畳半

- ・佐七と小糸は仲居お光に勧められ、酒酌み交わしている。お光祝儀をもらい、下る。
- ・川崎が小糸を探しに来る。自分が呼んでいる芸妓となぜ酒を飲んでいるのかと、佐七を詰問し、盗人と同じだから警察に連れて行くとわめく。
- ・村上が出てきて、その場をおさめる。川崎もしぶしぶ入る。
- ・佐七帰ろうとして、風呂敷を取ると、以前と結び目が違っている。

「木がしら」

③魚十、庭の普請場

- ・仲居おしまが六三郎の削ったかんなくずをほしがる。与吉（五郎はこの役だったと思われる）は自分のでもよいではないかと言い争う。
- ・魚十のおかみお辰と芸妓おそのの話。おかみはおそのに村上の世話をうけるように勧める。おそのはきっぱり断る。
- ・そのためには、恋しい男がいるといえばよいとなり、その男は誰がよいかという相談になる。
- ・与吉が名乗りでるが、とても色男には見えないので、六三郎に頼み込む。
- ・六三郎ははじめ渋っていたが、お辰とおそのの熱意にほだされ、断り切れず承知する。
- ・村上が奥より出てきて、お辰におそのの返事を尋ねる。お辰は、おそのには情夫がいるので無理だと言う。
- ・箱廻しの千吉は、自分はいつもおそのについているが、そんな男はいないはずだと言う。
- ・村上・川崎・千吉は、その男の名を問い詰める。
- ・六三郎は与吉に促されて、みんなの前に出て来る。
- ・村上らは怒る。おそのは六三郎に申し訳なく思いながら、六三郎に頼る。
- ・川崎らは六三郎を痛めつける。六三郎に唾を吐きかけ、捨て台詞して奥へ入る。
- ・残ったおそのは、六三郎の鑿で自分の小指を切り、六三郎に渡して深い縁を契る。
- ・お辰も与吉も、おそのと六三郎の中を取りもとうとする。
- ・それでも六三郎は黙っているのので、おそのは自害しようとする。みなみな止める。

- ・与吉は二人に固めの杯をさそうとする。
- ・恥ずかしがる二人を六畳の間に上げようとする。逃げようとするのを与吉は逃がさない。
- ・お辰も喜ぶ。 「キザミ 幕」

【中之巻】

「流行歌にて幕明く」。床の清元。

①隅田川

- ・この幕は清元を地としていて、七五調のきどった台詞がめだつ。
- ・佐七と小糸は別々に出て隅田川にくる。佐七は糸屋の養子ゆえ、店の金三百円をだまし取られ、店ののれんに傷をつけぬよう、死を覚悟している。
- ・小糸は川崎に言い寄られ、金がなければ佐七と添い遂げられないため、やはり死ぬ覚悟をしてきた。割り台詞、のち暗闇の中で二人はぶつかり、出会う。
- ・小糸は佐七といっしょに心中したいと願うが、佐七は抱え主に言い訳が立たぬので、芸妓の小糸といっしょには死ねないという。
- ・小糸はそれならと、先に川へ飛び込もうとするのを、佐七が止める。
- ・小糸の抱え主の三河屋宗兵衛が来かかり、立ち聞いていて、小糸と佐七を止める。
- ・そこへ六三郎も出てきて、佐七のために二人の力になることを約束する。
- ・宗兵衛は六三郎に、おそののこともよろしく頼む。

「水音をかぶせ にぎやかに キザミ 幕」

このところで宗兵衛の台詞のあとに、「和田」の丸印が捺されている。ここで、宗兵衛の役を五郎（中村珊之助）が演じたものか。

【下之巻】

①新橋おその屋形の間（三河屋）

- ・宗兵衛は頼母子の掛け金を払っている。今月と来月の二つ分を払い感謝される。
- ・宗兵衛はおそのと六三郎に頼まれた三百円（佐七がなくした金の償い）の金策にでかける。
- ・宗兵衛が出たあと、見習い子のおしげが一人残り、独り言でおそのや小糸のことなどを噂する。
- ・そこへ村上が川崎を連れてやってくる。おその、小糸、千吉が出て来る。皆揃って中に入り、おしげと話をする。おしげは村上らを座敷へ案内する。
- ・おそのは自分の客で金を貸してくれそうな人に借金を頼んでいて、その返事を待っている。が、断りの返事ばかりがくる。
- ・六三郎出てきて、佐七とすれちがう。佐七は六三郎に十時までに金ができなければ死ぬ覚悟だと告げる（あのあたり、「和田」の丸印があるが、六三郎は終始無言。無言で五郎が演じていたのか、あるいは別に台詞書きがあるという意味か）。
- ・おしげは六三郎に会い世辞を並べる。おそのはそっと六三郎に金を渡し、それをおしげに祝儀として渡させる。
- ・六三郎が帰ったあと、おしげはランプに火をいれるなど、夜の準備をする。
- ・田中屋の使いの甚七が来て、旦那がおそのに頼まれていた金ができない旨を伝える。おそのは甚七を冷たくあしらい、早く帰れと追い返す。

- ・おそのは六三郎に頼まれた金が十時までにはできそうにないので、嘆く。
- ・村上奥より出てきて、その金を貸してやろうという。一度ふられたお前を自由にしようとはいわないが、六三郎と別れるだけでいい。といいながら、自分に靡けば玉の輿なのに馬鹿なやつだとあざける。
- ・宗兵衛がその様子を聞いていて内に入る。宗兵衛は村上がおそのに三百円を渡し、おそのはそれを六三郎に手切れ金としてやれば、八方丸くおさまるのではないかと提案する。
- ・村上は、おそのが素直に自分に靡いてくれればよいがむつかしかろうというので、宗兵衛は抱え主の自分がそうさせると保証する。
- ・村上は、六三郎をここに呼んでおそのの口から縁切りが聞きたいと言う。
- ・宗兵衛は承知し、村上は奥へ行って酒にする。
- ・宗兵衛はおそのに、金をつくって六三郎に男を立てさせるために、がまんして村上の前で「愛想づかし」を言うことを勧める。
- ・おそのは宗兵衛に言われて、縁切状を書き、おしげがそれを六三郎に持って行く。
- ・宗兵衛は奥へ入る。おその、一人残り、飲めない酒をあおる。
- ・おしげ、六三郎を連れて来る（六三郎無言。「和田」の丸印）。
- ・宗兵衛は六三郎に、頼まれた金ができないという。しかも、おそのには身請客が出てきたため、六三郎のために金をやる理由がなくなったと言う。
- ・村上、川崎、千吉も出てきて、六三郎と取っ組み合いとなる。
- ・おそのは六三郎に愛想づかしを言う。
- ・村上はその言葉に乗って、六三郎を芸者の油をすする油虫だと罵る。
- ・川崎や千吉も、六三郎に悪口する。六三郎、じっと耐える。
- ・かつて、おそのが六三郎への心中だてに切った小指を、宗兵衛が六三郎から取り返し、村上に渡す。
- ・六三郎終始無言。こぶしをあげるのを、宗兵衛が止める。
- ・小糸は六三郎に、佐七を哀れと思うなら堪忍してほしいと頼む。
- ・六三郎は千吉を投げ飛ばし、花道へ入る。
- ・宗兵衛は村上から約束の三百円をもらい、おそのに渡す。
- ・村上らはおそのを連れて、奥へ行こうとするが、おそのは癪をおこして、皆々「医者よ / \」と大騒ぎする。

「返し」

②（六三郎内の場）

- ・母おとみ、弟子与吉、六三郎の帰りを待っている。
- ・近所で新内の会があるので、六三郎が帰ったらみな連れだって来てくれるように、世話役が伝えに来る。
- ・おとみ、六三郎の帰りを待って、酒の肴をこしらえはじめる。
- ・新内の会がはじまったらしく、「関取千両幟」が聞こえて来る。この新内にあわせるように、六三郎花道より帰る。
- ・おとみは、六三郎の無事を摩利支天に祈る（おとみは「千両幟」の「お富」を利かせている）。

(与吉の台詞に「和田」の丸印が捺されていて、五郎は与吉の役だったか。ここも六三郎は始終無言)

- ・与吉が六三郎の髪をなでつけて、深刻な顔をしている六三郎の事情を聞き出そうとする(「千両幟」の趣向)。
- ・六三郎は思いつめた様子で、どうしても行かねばならぬ仕事があるという。
- ・悪い予感がして、母は行くなと止める。
- ・六三郎は聞き入れようとせず、母に勘当を願う。
- ・母も与吉も六三郎のかたくなな態度に怒る。六三郎は一散に花道に向かって走り出す。
- ・与吉は道具箱の鑿が一丁なくなっているのに気づく。胸騒ぎして、自分も鑿を持って、六三郎の跡を追いかける。
- ・表にうどん屋が出ていて、与吉はぶつかるが、かまわず花道へ急ぐ。

「流行歌をかぶせ よろしく 返し」

③品川海岸

- ・「仕出し」がうどんを食べながら、今夜聴いた講釈の話をしている。女にだまされたと気づいて女を殺してしまう話だった。
- ・六三郎は様子をうかがいながら、塀を越えて屋敷の中へ入る。

「返し」

④おそのの部屋

- ・おそのはおしげに、六三郎の所へ真実の思いを書いた手紙を持って行ってほしいと頼む。
- ・六三郎が出てきて、おそのを傷つける。千吉が出てきて止める。

「返し」

⑤路上

- ・仕出しが人力車夫と車賃でもめる。巡査が出てしずめる。
- ・村上・川崎出てくる。六三郎は二人を殺してしまう。
- ・佐七や宗兵衛が出てきて、おそのが愛想づかしを言った本当の訳を話す。
- ・巡査や警察が出てきて、村上・川崎はお尋ね者の大賊だとわかり、六三郎の行為は減免されるであろうと、教えてくれる。

「キザミ 幕」

ここで一応決着はついており、上中下の首尾も整っている。この作品は古くからある「おその六三」物を明治の時代にあわせて改作したものと思われる。ただし、初演を確認できていない。ご教示を乞いたい。五郎は書き写しながら、「和田」の印の部分に、自らの創作を加えた可能性を感じさせる。なお、時代は下がるが、『近代歌舞伎年表 大阪篇』が載せる明治34年(1901)7月、九条の明治座切狂言「礼盟縁結」は外題名・場割・役名がほとんど一致していることを指摘しておきたい。

しかし、この本の大きな意味はここから後にあるのである。このあと増補がつき、茶色の厚紙表紙には以下のような文字が見える。

明治三十二年一月吉祥日書初下
作者 茅海庵一堺漁人

おその
六三 神禮盟縁結

補増 公判廷之場
壹 幕



書き始めた「明治三十二年一月」という年時が重要であり、「茅海庵 一堺漁人」という作者名も注目されよう。増補の最後の一行に「右わ中村珊之助自作なり」と明記している。この増補の場は、五郎がまだ中村珊之助だった時期の自作と断定してよいと思うのである。

増補の内容は「公判廷の場」一幕。まず、一枚目表の上部に裁判の舞台の道具の図。下部に小道具の一覧。「いす 八／長いす 沢山／巡査 ぼう くつ さアベル／とりなわ／すゞり箱／囚人がさ／廷丁 ぼう くつ」。その裏は白紙。

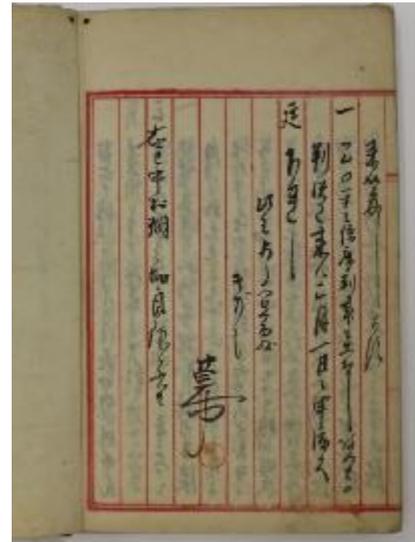
次の丁から罫紙となって、「役人 替名」。「大工六三郎／代言 原三郎／花井その／判事 丸井操／々 嶋田角三郎／廷丁 泉三吉／書記 岩尾久雄／裁判長 清水一正／検事 由田良一／三河屋宗兵衛／巡査 壱人／ぼうちよう人 沢山」。

そして「幕明くと 廷丁壱人 ぼうちよう人沢山 上手より出てよきところへいなほる みな / \ よろしく 捨ぜりふ よきところへ 二重上手より書記出来る(岩尾久雄)」からはじまり、歌舞伎台帳の形式はみごとに守られている。

そのあと、高田六三郎と代言人登場。裁判長、判事、検事らも登場。六三郎の尋問。代言人が被告の体調を気遣い椅子に座らせてほしいと頼む。了解される。三河屋宗兵衛と花井そのが参考人として呼び出され、尋問がはじまる。宗兵衛は、おそのと六三郎は抱え主である自分が承知の上の仲であり、夫婦同然だったという。おそのは村上に言い寄られており、村上の方から六三郎に切りつけたにちがいないと訴える。検事の由田良一は、おそのが腕に怪我しており、おそのが村上になびき、それを知った六三郎が二人の殺害を狙ったのではないかと疑う。六三郎が仕事で使う鑿を所持して出かけたゆえに殺意があったと主張する。それに対し、代言人は六三郎が親孝行であり、おそのとの仲もむつまじく、おそのが六三郎を裏切るとは考えられず、奸賊村上の言いなりになることはない。村上らが死亡した今、六三郎の殺害の証拠は不十分であり、疑わしきは罰せずの法の精神に則り、無罪を主張した。裁判長は双方の主張を聞き、判事らと議論の上、三月一日に判決を言いわたすと宣言して、閉廷となる。

以上のあらすじからわかるように、増補の部分は公判の様を詳しく伝えようとしたものである。奉行物の大詰と同じだといえはいるが、明治の新時代の公判の様を描こうとした、作者の新時代への思いは読み取れよう。

そして本文の最後は、廷丁の「下れ一」の声があり、「此もよう宜敷 キザミ 幕」となる。そして、次の行にまったく同筆で「右わ中村珊之助自作なり」と明記している。中村珊之助（のちの曾我廼家五郎）の（現存する）創作第一作と見てよいのではなかろうか。



所蔵資料の紹介

演芸関係の SP レコード文献資料について

大西 秀紀

(資料整理部会委員)

(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員)

当館所蔵の約 70,000 点の資料の中には 10,000 点を超える SP レコードが含まれていて、これらはいままでもなく第一級の資料である。現代に生きる私たちが初代春団治やエンタツ・アチャコ、ワカナ・一郎たちの声に触れられるのも、彼らが多くの録音を SP レコードに残してくれたからに他ならない。しかしただ単に聴いて楽しむだけならともかく、これらを演芸資料として供するためには、レコード盤の素性をできるだけ明らかにする必要がある。本稿ではその作業に有効な文献資料のいくつかをご紹介します。なお文中の「資料コード」とは、当館所蔵の資料それぞれに付けられた管理番号である。

〈1〉 倉田喜弘編『演芸資料選書 4 演芸レコード発売目録』国立劇場、平成 2(1990) (資料コード: 00358374)

本書は芸能史研究家倉田喜弘^{くらた よしひろ}〔昭和 5(1930) - 〕による、日本国内で作られた演芸 SP レコードのディスコグラフィ(音盤目録)である。内容は落語、万歳・漫才、漫劇(コント)、漫談・漫芸、音曲・雑曲、声色・物真似、太神楽・あほだら経、講談、浪花節、ヴァラエティの全 10 ジャンルに分類されていて、明治 42(1909)年から昭和 20(1945)年までの期間を調査の対象としている。この期間以前にも英グラモホンを初めとする海外メーカによる出張録音盤が存在するが、本書ではあえて触れていない(但し日本人の著作権意識に大きな影響を与えた桃中軒雲右衛門の独ライロホン盤は唯一の例外として掲載している)。

掲載のデータは現物のレコード盤とは照合せず、新聞 16 紙、雑誌 14 誌に掲載されたレコード各社の広告を主体とし、月報やチラシ等があれば適宜それらと照合させたという。ただ広告はレコード番号まで記載されるケースは少ない。本書でレコード番号が空欄になっているものが少なからず目に付くのは、月報等と照合できずレコード番号の情報が得られなかったためと考えられる。

演芸のそれぞれのジャンルに関して、レコードコレクターの手によって作成されたディスコグラフィは存在するが、それらはあくまでも個人所有の情報で、一般には公開されていない。そのような状況の中、本書が国立劇場の演芸資料選書として一般に発売されたことで、演芸の調査研究をする者が得る恩恵は計り知れないといえる。特に 306 ページにわたる浪花節レコードのリストは圧巻である。

そんな本書にも問題点がないではない。データの主体を新聞・雑誌に依存する以上、レコード各社が広告を掲載しなければ、実際には発売されていてもそのレコードの存在はリスト上に反

映されないことになる。コロムビアやビクターといった大手の場合は、ほぼ確実に毎月広告が掲載されるが、中小メーカーの場合は必ずしもそうではない。特に会社の業績が悪化すると、同社の広告はたちどころに紙（誌）面から姿を消す。また広告を出ていても紙幅の都合で紹介されないレコードが存在することもあれば、臨時発売のため広告や月報には情報が未掲載のまま終わるケースもある。したがって本書のデータが演芸レコードのすべてでは決してなく、洩れているデータが存在することをまず念頭に置かなければならない。

この問題点を解消するには、現物のレコード盤にも目を配り、データと照合しながら本書の内容を自身の手で更新する以外に方法はないといえる。

〈2〉 都家歌六『落語レコード八十年史』国書刊行会、昭和 62(1987) (資料コード 上巻 : 00503466、下巻 : 00503474)

噺家であると同時にわが国屈指の落語レコードコレクターだった八代目都家歌六〔昭和 5(1930)－平成 30(2018)〕による落語レコード史。上下 2 巻からなり、上巻の内容は各レーベルに関する簡単な解説が付いたレーベル別 SP レコードディスコグラフィ、演者別 LP レコードディスコグラフィ、戦後の雑誌『新演芸』より転載された正岡容〔まさおかいる〕「寄席古音盤探求」、「東西寄席話芸人没年表」を収録する。下巻は上巻のレーベル別 SP レコードディスコグラフィを演者別に並べ替え、各演者についての簡単な解説と一部音源の速記（文句集）を付け加えた「噺家列伝・文句集・ディスコグラフィ」と、上下巻を通した「演者別索引」から成る。巻末に「明治・大正・昭和著名噺家師弟系譜 近世新釋東西落語家系図」が付く。

本書のディスコグラフィは前掲書〈1〉のように無機的なデータの集合体ではなく、会社別や演者別にまとめられているので、使い勝手は非常に良い。ただすべての落語レコードが網羅されているわけではなく、レコード番号や発売時期についても未記入の部分が見受けられる。そのため〈1〉などと対照してデータを補う必要はあるだろう。しかし落語レコードに関心を持つ者にとっては必読の書であり、刊行後 30 余年を経た今でもその価値は色褪せていない。歌六を始め落語レコードコレクターの道標となった正岡の「寄席古音盤探求」の転載も貴重である。

〈3〉 倉田喜弘・岡田則夫篇〔おかだのりお〕『大正期 SP 盤レコード 芸能・歌詞・ことば全記録 全十一巻』大空社、平成 9(1997) (資料コード ① : 00188201、② : 00188219、③ : 00188227、④ : 00188235、⑤ : 00188243、⑥ : 00188250、⑦ : 00214668、⑧ : 00214700、⑨ : 00214726、⑩ : 00214783、⑪ : 00214809)

本書は大正期に刊行された日本蓄音器商会のワシ印ニッポノホンと、東京蓄音器の富士山印東京レコードの音譜文句集の復刻である。音譜文句集とはレコードに録音された詞章を活字化し、芸能のジャンルごとに編集し一冊にまとめたものである。当然のことながら、同社が発売した落語、講談、浪花節、万歳といった演芸も含まれるため、本書からそれらの内容（詞章）や演者、レコード番号、おおよその発売時期等を知ることができる。日本蓄音器商会のものは基本的に前年までの内容に新たな情報を追加するかたちのため内容の重複があるが、東京蓄音器のものは第一集に対して第二集は新たな内容のみで、それぞれに内容の重複はない。大正 8(1919)年 9 月ま

でに発売された東京レコード（レコード番号 1600 番台）の内容をたどることが出来る。原本の刊年月は次の通りで、日本蓄音器商会のものは途中から書名が変わる。丸数字は本全集における巻号である。

『日本蓄音器文句全集』①大正 2 年 12 月、②大正 3 年 12 月、③大正 4 年 3 月、④大正 5 年 2 月、『ニッポノホン音譜文句全集』⑤大正 6 年 7 月、⑥大正 7 年 6 月、⑦大正 8 年 3 月、⑧大正 9 年 7 月、⑨大正 11 年 8 月、⑩『東京レコード文句集第 1 集』大正 6 年 9 月、⑪『東京レコード文句集第 2 集』大正 8 年 10 月

ニッポノホンの音譜文句集はいまでも古書店などで見かけるが、東京レコード文句集は稀覯本で、本全集で復刻された意義は大きい。

〈4〉 『日本の基礎音楽資料としての SP 盤の実態に関する調査研究〔報告書〕』（財）日本伝統文化振興財団、平成 22(2010) （資料コード：00657973）

本書は財団法人日本伝統文化振興財団が文化庁委託業務として実施した「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」の報告書だが、その中にテイチクと日本ビクターが発売した SP レコードの番号順ディスコグラフィが含まれていることで、両社の SP レコードの書誌情報を一覧できる画期的な資料となっている。両社ともに数多くの演芸レコードを発売したが、特に奈良に本社を置いたテイチクは、創業以来演芸や流行歌など庶民的な芸能のレコードを積極的に発売していて、同社の落語、漫才、浪花節等のレコード情報もここから多数得られる。惜しいのは日本ビクターのディスコグラフィから、レコード番号 50000 台の内昭和初期の情報の一部が欠落していることで、同財団による完全なデータの公開を切望する次第である。

〈5〉 『音盤目録Ⅳ』東京国立文化財研究所、昭和 61(1986) （資料コード：00368993）

東京国立文化財研究所（現・東京文化財研究所）所蔵 SP レコードのディスコグラフィ。『音盤目録』のⅠ～Ⅳは義太夫節 SP レコードの大コレクターだった安原仙三〔明治 36(1903)－昭和 30(1955)〕旧蔵コレクションに関するもので、そのⅣである本書には落語、講談、浪花節、万歳・漫才、声色・物真似、太神楽等のジャンルが含まれている。

安原が収集した義太夫節レコードに比べると枚数は少ないが、目利きが選んだレコードには稀覯盤も多く含まれ、非常に充実した内容である。公的機関所蔵の演芸レコードコレクションとしては群を抜く存在だといえる。

〈6〉 『国立演芸資料館所蔵 演芸レコード目録』日本芸術文化振興会、平成 3(1991) （資料コード：00358382）

国立演芸場所蔵の演芸レコードの目録。流行歌等も含む。SP、LP に関するものだが、分量としてはさほど多くはない。

〈7〉 レコード各社の総目録・月報類

- * 『コロムビアレコード総目録 邦楽 1932 年度』日本コロムビア蓄音器、昭和 7(1932) (資料コード : 00616698)
- * 『コロムビアレコード／リーガルレコード 邦楽総目録 昭和 13 年度版』日本蓄音器商会、昭和 13(1938) (資料コード : 00616698)
- * 『コロムビア舞踊レコード目録』日本コロムビア、昭和 30(1955) (資料コード : 00616714)
- * 『ビクターレコード邦楽総目録 附スターレコード』日本ビクター蓄音器、昭和 13(1938) (資料コード : 006166664)
- * 『ビクター3 月新譜 邦楽・洋楽』日本ビクター、昭和 28(1953) (資料コード : 00616672)
- * 『ビクターレコード 邦楽・洋楽 5 月新譜』日本ビクター、昭和 29(1954) (資料コード : 00616680)
- * 『ポリドールレコード総目録 昭和 5 年』日本ポリドール蓄音器商会、昭和 5(1930) (資料コード : 00616623)
- * 『ポリドールレコード総目録 昭和 7 年』日本ポリドール蓄音器商会、昭和 7(1932) (資料コード : 00616649)
- * 『ポリドール営業用総目録 昭和 13 年版』日本ポリドール販売、昭和 13(1938) (資料コード : 00616656)
- * 『ポリドールレコード／キングレコード 9 月新譜』日本ポリドール蓄音器、昭和 7(1932) (資料コード : 00616631)
- * 『オリエントレコード総目録 1931 年版』日本蓄音器商会、昭和 6(1931) (資料コード : 00616607)
- * 『ニッターレコード目録 (昭和 7 年 1 月改訂)』日東蓄音器、昭和 7(1932) (資料コード : 00616615)
- * 『タイヘイレコード 正月新譜特選総目録』太平蓄音器、昭和 8(1933) (資料コード : 00616599)
- * 『正月新譜 附特選目録 タイヘイレコード／ニッターレコード／クリスタルレコード』大日本蓄音器、昭和 15(1940) (資料コード : 00657759)
- * 『タイヘイレコード 7 月新譜付抜粋目録』大日本蓄音器、昭和 16(1941) (資料コード : 00657767)
- * 『タイヘイレコード 10 月新譜付抜粋目録』大日本蓄音器、昭和 16(1941) (資料コード : 00657775)

レコード各社が発行した月報や総目録は、レコードの書誌を調べる上で最も重要な基礎資料で、極言すると各社の月報さえ揃えばレコードの書誌に関するたいていの疑問は解決できるといえよう。ただこれらの多くは当時レコード店の店頭で無償配布されたいわばチラシ的な印刷物で、書籍のように持ち主の手許に長く保管されるようなものではない。したがってこれらを網羅的に収集するのは極めて困難だといえる。当館所蔵の総目録・月報類の数はごくわずかだが、いずれも貴重な資料であることに変わりはない。

展示資料の紹介

高草 瞳（上方演芸資料館学芸員）

島田 智子（上方演芸資料館司書）

1.



2.



1. 初代桂春団治の羽織（丈 73cm、衿 64cm）

桂春団治（初代）明治 11～昭和 9（1934～1878）年

小説や芝居、演歌などで語り継がれる破天荒な春団治像とは異なり、穏やかな印象の羽織。白の細かい縦縞が入った淡いあずき色で、裏地には茶道具の絵。常着だったといわれている。

当代の柳家小三治師匠が、岡本文弥（新内節の太夫。平成 8（1996）年没）から譲られ保管していたのを、平成 13（2001）年当館に寄贈。

2. 松竹新喜劇 6 月公演ポスター 昭和 49（1974）年 5 月 31 日初日、道頓堀・中座（77.4×52.4cm）

松竹家庭劇をたちあげた中心人物のひとりで、お婆さん役で有名だった曾我廼家十吾が同年 4 月に亡くなったことから、彼が「茂林寺文福」の筆名で書いた作品を藤山寛美が中心となって興行。7 月には演目を一部変えて東京の新橋演舞場でも公演した。当館は中座公演のパンフレットと新橋演舞場公演のプログラムも所蔵している。

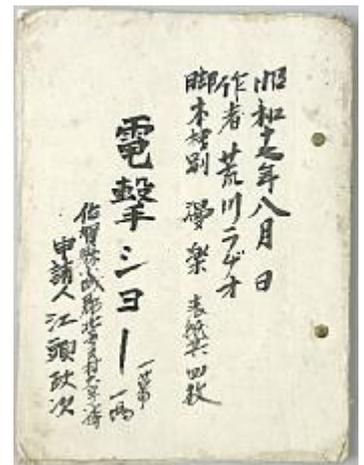
3.



4.



5.



3. 「日本の講談」ポスター 昭和 47 (1972) 年 10 月 6 日、大阪高島屋ローズホール (35.6×51.6cm)
戦後の上方講談は長く存続の危機にあり、この時の出演者は、旭堂南陵（三代目）以外は関東の演者。このうち神田伯山は、来年（令和 2 年）2 月に真打ちに昇進する神田松之丞が 44 年ぶりに六代目を襲名することで話題の名跡。

南陵は先代の実子で、衰退していた上方講談を共に守り、先代が没した翌年の昭和 41 (1966) 年に襲名。弟子を多数育成して復興に尽力した。

主催の「上方落語をきく会」は当時、雑誌『上方芸能』の編集発行母体。（『上方芸能』編集部が発行となったのは昭和 49 年 5 月の 35 号から。）

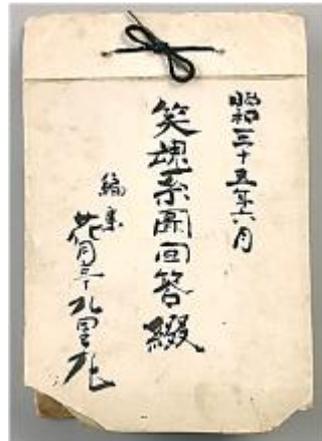
4. 角座ポスター 昭和 37 (1962) 年 9 月、道頓堀・角座 (75.6×51.6cm)
同年同時期のうめだ花月のポスターと並べて展示しており、後に殿堂入りする芸人の名前がたくさん確認できる。展示場所にはこの期間の土日の新聞のラジオ・テレビ面も設置しているので、芸人が劇場だけでなくテレビやラジオでも活躍していたことがうかがえる。

5. 検閲台本 電撃ショー 作者：荒川ラジオ (26.2×19.1cm)
検閲印は佐賀県の印で昭和 17 (1942) 年 8 月 3 日検閲と記されている。表紙共 4 枚と短いネタで、楽器を用いた音楽ショーの台本である。メンバーはアコーディオン：井上義夫、ギター：安部忠夫・歌村富士子、三味線：浜田せつ子、ウクレレ：三宅愛子の 4 名で演じられていた。浪曲や「露営の歌」を盛り込んだネタが書かれており、朱書きの取り消し線などはみられなかった。

6 - ①



6 - ②



7.



6. ①九里丸置土産笑根系図 昭和36(1959)年1月(39×26.5cm)

②笑魂系図回答綴 昭和35(1960)年6月編集(28×16cm)

漫談家であり、上方演芸界の裏方としても活躍した花月亭九里丸が自費出版したもので、上方演芸を研究する上で貴重な資料のひとつである。

凡例には、「この『九里丸置土産笑根系図』は昭和三十五年八月、大阪京都兵庫の二府一県下を根拠に活動されている漫才、落語、奇術、曲技、曲芸、講談、司会、漫談、腹話術その他の色物を職業としている四百四十二人を基準にアンケートして、その回答によつて編集したものであります。」とかけられている。

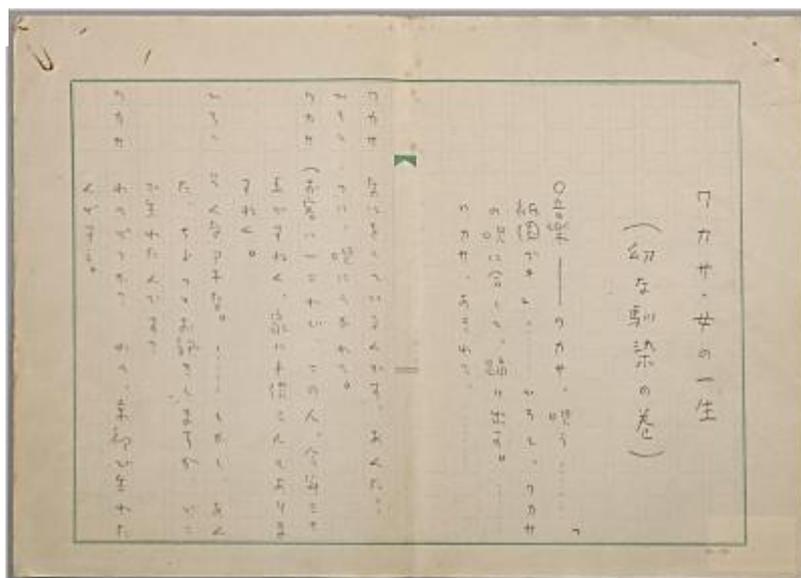
当館所蔵の「笑魂系図回答綴」には、この系図を作成するためにとつたアンケート等371名分の記録が綴られている。

7. 浪花方言(上方なまり言葉)大番付 昭和32(1957)年8月15日 勸進元：杉本宇造(46×35.4cm)

今回、50音パネルとして大阪弁を紹介するにあたり新たに購入した資料。

番付形式で大阪弁が紹介されており、今現在も使われている言葉から近年は聞かなくなった懐かしい言葉を見ることが出来る。「こんな言葉があったのか」と時間をかけて鑑賞する来館者も少なくはない。

8.



9.



8. 秋田實直筆台本「ワカサ・女の一生（幼馴染の巻）」

ミスワカサは歌手、島ひろしは役者として芸能界に入り、昭和16（1941）年にコンビ結成。昭和22（1947）年に秋田實を相談役として発足した「MZ研進会」に参加、その後は宝塚新芸座に入り、ミヤコ蝶々・南都雄二、夢路いとし・喜味こいしらと人気を競い合った。

「ワカサ・女の一生」と題されたこの台本は、いつ頃書かれたものかは不明。

9. 富士月子のポストカード（14.1×9 cm）、くし（13.1 cm）、手鏡（24.5 cm）

富士月子 明治31～昭和51（1898～1976）年

50音パネルのキーワード「べっぴんさん」というテーマに沿って、身だしなみを整える私物とともに、当時の人気うかがえるポストカードを展示している。

このポストカードの裏面には、「二葉館」の名が書かれている。二葉館は昭和初めに東成区今里新橋通りに富士月子の常設館として建てられた浪花節の席であった。他にも当館には衣装をはじめとした富士月子の收藏品が多数あり、くしと手鏡は鏡台の中に保管されていたものを展示している。

10.



11.



10. 雑誌『漫才』(A5判)

秋田實が昭和43(1968)年7月に創刊。創刊号の「発刊の辞」は、秋田の「この雑誌はズバリ言つて、漫才台本の雑誌である」という文章で始まる。初めは月刊で26冊、休刊をはさんで隔月刊になってから10冊、計36冊発行された。秋田が亡くなった年の12月発行の「秋田實先生追悼号」で終刊。

現在展示中の「寄席でおなじみのテーマソング」は3回シリーズで、全部で15組のテーマソングを演者の写真入りで紹介している。担当の柴田信子も漫才作家。当館は彼女の直筆原稿や、構成でかかわった放送台本も所蔵している。

11. 姫路上方はなしを聴く会の看板(24.8×7.9cm)

この会の中川清(のちの桂米朝)とその同級生の有本隆を发起人・責任者として昭和21(1946)年6月に始まり、第七回まで続いた。第一回から第三回までは「第〇回上方はなしを聴く会」として開催されていた。

四代目桂米團治の発案で、昭和22(1947)年6月29日に行われた別会第一回で「姫路上方はなしを聴く会」となる。この年は戎橋松竹の開場や道頓堀角座再建、この会の发起人である桂米朝をはじめとした上方落語四天王の入門の年でもあった。

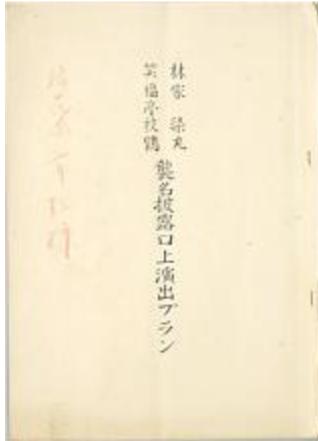
12 - ①



12 - ②



13 - ①



13 - ②



12. 曾我廼家五郎の興行案内 昭和 15 (1940) 年 2 月 中座 (14×9 cm)

曾我廼家五郎 明治 10～昭和 23 (1877～1948) 年

現在、展示している曾我廼家五郎の絵葉書のレプリカの中から 2 点を紹介する。

葉書の差出人の横には「昭和十五年二月」「大阪市南区道頓堀 中座ニテ 曾我廼家五郎」とある。

消印から写真【12-①】は 2 月 1 日からの興行、写真【12-②】の葉書は、消印と写真左下のイラストに添えられている「十六日 五郎劇 二の替り」という一文から 2 月 16 日からの興行案内とおもわれる。

昭和 15 (1940) 年は紀元二千六百年の記念興行が方々で行われた年でもあり、『松竹百十年史』によると上旬の公演は「皇紀二千六百年奉頒記念上演」と題した公演がおこなわれていた。下旬の公演は、同時期のプログラムも所蔵しており、昭和 15 年 2 月 16 日初日～25 日まで行われていたことが確認できた。

13. 林家染丸・笑福亭枝鶴の襲名披露口上の演出プラン、襲名披露特別興行プログラム

昭和 28 (1953) 年 8 月興行上席 戎橋松竹

林家染丸 (三代目) 明治 39～昭和 43 (1906～1968) 年 昭和 32 (1957) 年結成の上方落語協会初代会長

笑福亭枝鶴 (四代目) 大正 7 ～昭和 61 (1918～1986) 年 のちの六代目笑福亭松鶴

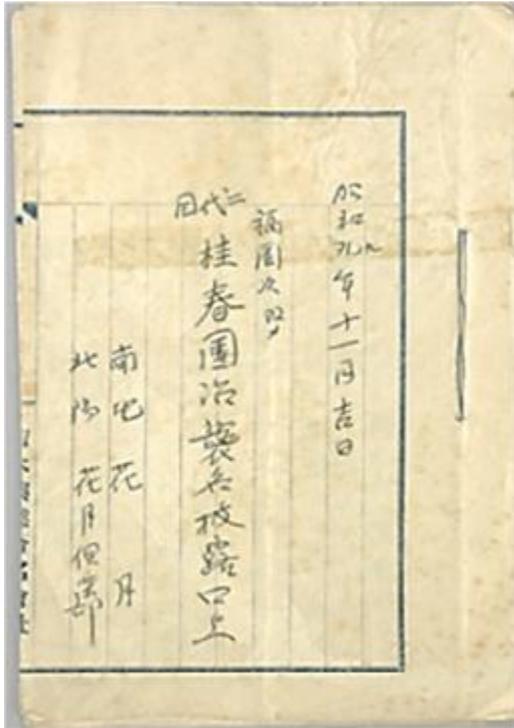
①演出プラン (24.8×17.8cm)

口上での演者の出入りや照明、おはやしのタイミングなど全体の流れと、浮世亭歌楽、都家文雄、浪花家市松、桂枝太郎、旭堂南陵 (二代目)、桂小文治の挨拶が記されている。

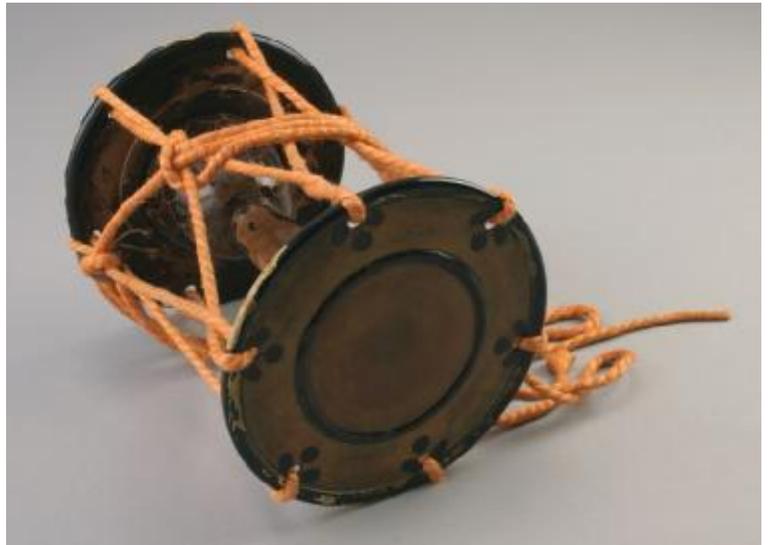
②プログラム (19.5×13.3cm)

展示では、紋付袴姿で初々しくも凛々しい両人の写真と略歴のページをご覧いただける。

14.



15.



14. 福團次^(ママ) 改メ二代目桂春團治襲名披露口上の台本

昭和9(1934)年11月 南地花月、北陽花月俱樂部 (24.8×17.1cm)

桂春團治(二代目) 明治27~昭和28(1894~1953)年

初代が亡くなった翌月、異例の早さで二代目の襲名披露が行われた。列席した林家染丸(二代目)、三遊亭円馬(三代目)、桂三木助(二代目)、桂文治郎と二代目の口上が吉本興業合名会社名入りの用紙に記されている。

15. 砂川捨丸の鼓

砂川捨丸 明治23~昭和46(1890~1971)年

捨丸が愛用した鼓。平成元(1989)年にご遺族から大阪府に寄贈されたことが、上方演芸資料館設立のきっかけとなった。

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

【経緯】

- 平成元年 3月 故砂川捨丸氏の遺族から氏ゆかりの鼓を受領
- 平成2年 1月 上方演芸保存振興検討委員会（会長：井上 宏 関西大学教授）を設置
- 平成4年 3月 検討委員会が基本構想を策定（上方演芸保存振興事業の拠点施設として「上方演芸資料館（仮称）」の設置を提言）
- 平成5年12月 資料館の立地場所を決定（大阪府中央区難波千日前）
- 平成6年 7月 基本構想を受け、府が基本計画を発表
- 平成7年 3月 上方演芸資料館入居予定ビル（YES-NAMBA ビル）着工
- 平成8年 3月 大阪府立上方演芸資料館条例公布
- 同 年 8月 上方演芸資料館の愛称（ワッハ上方）とシンボルマークを決定
- 同 年11月 府立上方演芸資料館オープン（15日）
- 平成21年12月 戦略本部会議決定：①本館の役割は「資料の収集・保存・活用（公演、育成は民）」、②吉本興業からの提案を受け入れ、平成23・24年度は現地存続（但し、目標入館者数40万人を設定し、達成状況等を踏まえ、以降のあり方を検討）
- 平成22年12月 演芸ホールを廃止
- 平成25年 1月 戦略本部会議決定：①当面2年間は、現地において規模縮小の上、効率的に運営（入場料は無料）、②運営費は5千万円以下、原状回復費を含め1億円以下
- 平成25年 4月 展示室・レッスンルームを廃止
- 平成26年 7月 大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会が、今後の方向性を提言（※）
- 平成27年 4月 府の直営（資料整理を行いつつ、今後の方針を検討）
- 平成30年 7月 収蔵庫の資料を大阪府庁（咲洲庁舎）に移転
- 平成30年12月～リニューアル工事

【機能】

| 開館～22年12月 | | | 23年4月～24年3月 | | 25年4月～ | |
|----------------|----|------------------|-------------|-----------|-------------------------------------|-----------|
| 区分 | 場所 | 面積 (㎡) | 区分 | 面積 (㎡) | 区分 | 面積 (㎡) |
| 展示室 | 4階 | 1,170.991 | 存置 | 同左 | 廃止 (ライブラリ-は 9ブースに縮小 して7階へ) | - |
| 演芸ライブラリ- (無料) | | 150.0 (15ブース) | | | | |
| 小演芸場[上方亭] (有料) | | 98.44 (74席) | | | | |
| 演芸ホール (有料) | 5階 | 1,484.34 | 廃止 | - | | |
| 事務室 | 6階 | 326.705 | 存置 | 同左 | 廃止 | 609.943 |
| レッスンルーム (有料) | 7階 | 99.85 (60席) | | | | |
| 収蔵庫 | | 260.00 | | | 存置 | |
| (共用部分) | | 250.093 | | | | |
| 合計 | | 3,591.979 | | 2,107.639 | | 609.943 |

【管理運営】

| 期 間 | 管理運営 | 備 考 |
|--------------|------------------|--------|
| 開 館 ～14年3月 | (財)大阪府文化振興財団 | 管理運営委託 |
| 14年4月～18年3月 | 大阪府 | 直営 |
| 18年4月～22年12月 | (NPO)ニューウエーブ日東大阪 | 指定管理 |
| 23年1月～23年3月 | 大阪府 | 直営(休館) |
| 23年4月～27年3月 | 吉本興業グループ | 指定管理 |
| 27年4月～ | 大阪府 | 直営 |

【歴代館長】

| 期 間 | 歴 代 館 長 名 |
|---------------|------------|
| H 8 年 1 1 月 ～ | 粕 林 利 男 |
| H 1 1 年 4 月 ～ | 井 上 宏 |
| H 1 4 年 4 月 ～ | 有 川 寛 |
| H 1 8 年 4 月 ～ | 伊 東 雄 三 |
| H 2 3 年 1 月 ～ | ★大阪府直営<休館> |
| H 2 3 年 4 月 ～ | 河 井 泉 |
| H 2 5 年 4 月 ～ | 井 上 明 |
| H 2 6 年 4 月 ～ | 田 中 宏 幸 |
| H 2 7 年 4 月 ～ | ★大阪府直営 |

大阪府立上方演芸資料館 平成30年度年報

編集・発行 大阪府立上方演芸資料館
〒542-0075 大阪府中央区難波千日前12-7
YES・NAMBAビル7階
TEL : 06-6631-0884

令和元年10月発行
